

V ピピーノ版 (P)^{1*)}

1 ラテン語原典の諸稿本

フラ・ピピーノ〔修道士ピピヌス〕の版は、ポーロの全てのテキストのうち最も広く普及したものである。

これまでにすでに、最初のラテン語の形でのピピーノ版手稿本は研究者たちによって26確認されていたが¹⁾、私はさらに24加えることができた。これら50の手稿本の他に、ピピーノ訳が俗語になおされて伝えられているものを7加えなければならないし、さらにそこに一連の多くの印刷テキストが結びつく。

しかしこれは二次版であって、ポーロのオリジナルテキスト復元のためには凡庸な意義しかないゆえ、私が調査したかあるいは確実な情報を得ることのできたピピーノ稿本につき、なんらかの概略的な説明を記すにとどめる。なお、現在それが所在している都市のアルファベット順に記す。

確認されなかったり失われてしまった写本についても、何ほどこ簡単な説明を付け加える。

Berlino ベルリン^{2*)}

(1) 国家図書館現Ms.lat.968, ff.51b-119. 14世紀。A.Mullerミューラーは自分の刊本に用いたと言うが、実際はこれからピピーノの序文を転記し、いくつかの異読、特に固有名詞を引いているのみ。

Breslavia ブレスラウ

(2) 国家・大学図書館Ms.IV Fol.103, ff.1-67. 15世紀後半、シレジアの一フランチェスコ会士の作。S.Dorotheae Wratislav.図書館つまりブレスラウの小兄弟会図書館より。他に二人の所有者Elia, Alber.Opaleの痕跡あり。

Cambridge ケンブリッジ — 3本、ともに羊皮紙、14世紀。

(3) 大学図書館D d,I,17, ff.376-431. 雑録集。

(4) 同D d,VIII,7. 大部な集成版。ff.1-7に、P〔ピピーノ版〕第2巻第42章半ばあたりから終わりまでの少し縮約された断簡を収める。結びのタイトル「*historia tartarorum*＜タルタル人の歴史＞ここに終わる」は注目される。

(5) Gonville and Caius College図書館Ms.162, ff.26-86b. 東方ものの雑録集。

Dublino ダブリン

(6) Trinity College図書館Ms.632 (E.5.20),ff.46-88.タイトル*Marci Pauli Itinerarium*「マルコ・ポーロ旅行記」,15世紀、紙、雑録集、おそらく英国作。Pが大幅に短縮、3巻への分割はなく、全体が31章に分けられる。

Escorial エスコリアル

(7) 現Q II 13. 紙、15世紀、P単独。Olivares伯公爵図書館より。

Firenze フィレンツェ

(8) リッカルディアーナ図書館Ms.riccardiano 983. P第3巻第31章の「マアバル国を南西に500マイル下るとコイルム国に来たるが、そこにはキリスト教徒がいる」までを収める(cfr.Cordier-Yule n.45)。同Ms.riccardiano 2992は、「多くのユダヤ教徒と偶像教徒がいる。独自の言語を有する」と始まり、その続きであること疑いなし。美しい紙稿本、現存するうち最も優美なものの一つ。全体でcc.91, 2欄組、私見では14世紀前半。P稿本の大部分に欠くタルタル人の軍事組織についての章を有する。(図1)

Gand ガン

(9) 大学図書館Ms.13, ff.165r-225v. 15世紀、羊皮紙、2欄組。軍事組織の章なし。

Giessen ギッセン

(10) 大学図書館Ms.CCXVIII, ff.75-94. 15世紀。

Glasgow グラスゴウ — グラスゴウ大学Hunterian博物館に2本

(11) Ms.458 (旧Q 6 21). 羊皮紙、フランス人写字生、14世紀。Pの他にオドリーコ。

(12) Ms.84 (旧S 5 7),ff.191r-253r. 羊皮紙、15世紀。Ricardus plenus amoris fframpton<愛に満ちたりカルドゥス・フラントン>なる者の作。

Gottinga ゲッティンゲン

(13) 大学図書館Ms.Histor.61, ff.367-486. 北ドイツ作、東方もの：マンデヴィル、アレクサンデル大王伝、「マギ三王年代記」、プレスビテル・ヨハンネスの書簡、カルピネを含む。(2)と密接な関係にあり。

Jena イェナ

(14) 大学図書館Cod.Bosiano Q.10, ff.1a-139b. 紙、15世紀かおそらく14世紀末。Historia Alexandri「アレクサンデル伝」が続く。

Leida ライデン

(15) 大学図書館Ms.Vossiano latino fol.75, 最初のff.50.羊皮紙、15世紀前半。

Londra ロンドン — 大英博物館に4本

(16) Ms.Arundel XIII 163 C. マルコ・ポーロ ff.1-38, オドリーコ ff.38v-51.羊皮紙、1欄組、おそらくイタリア人写字生、私見では14世紀前半。

(17) Ms.Roy.14 C XIII, ff.236-268. 他にヤコポ・ダ・ヴィトリ、オドリーコ、ルブルク。羊皮紙大型版、1欄組、半斜字体、14世紀半ば以前。所有者としてSimone Bozoun (ノリッジ修道院長,1344-52)の名がみえる。

(18) Ms.Harley 5115, ff.1-47. 他にヘトゥムのラテン語テキスト、ジェフリー・オヴ・モンマスの「ブリトン史」を含む。羊皮紙、2欄組、半斜字体、14世紀半ば頃。

(19) Ms.Addit.19952, ff.2-84. f.2に「私Johannes de Cuseraにより1445年12月末日大晦日夕べの祈りの刻Confluentes<コブレンツ>市にて了」。おそらく著名なニコラス・クサヌスのために作成されたもの。

Lucerna ルツェルン

(20) 州図書館に14世紀の1断片、保存状態最悪、第3巻25-50章を欠く。

Milano ミラーノ

(21) アンブロジャーナ図書館Cod.miscellaneo H 41 Inf.(Pの部旧44)、cc.23-31. 近代の手でPのいくつかの部分、序文、第1巻最初の5章、第2巻最初の2章、第3巻最初と最後の章のみ。

Modena モーデナ

(22) エステンセ図書館Cod.estense lat.131 (α.S 6 14). P単独、ff.41. 美しい羊皮紙稿本、14世紀前半、職業写字生、2欄組。ピピーノの自筆稿かもしれないとのムラトリーの見解(SS,IX,583)は、誤り・欠落・写字生特有の間違いなど余りにも多いことからして、検討するまでもない。タルタル人軍事組織の章なし。1467年Borso公爵の蔵書目録n.68と同一物。Bertoniの調査によると、1457年ストロツィ伯爵夫人に貸し出され、1489年にはErcole I 公爵が自分の書斎に飾らせていた。(図2)

(23) 同Cod.X 1 5, ff.115a-118b. ピピーノが自著*Chronicon*『年代記』中に挿入したポーロの断片。かつては自筆稿と見なされたが、上と同じ理由から疑問視される。f.115a(lib.XXIV,cap.71)「これら風俗習慣の在り様については、フラ・ヨハンネス・デ・プラノ・カルピニから抜粋したものである。続いてその皇帝たち、彼らの言葉で(おそらくここに<マグヌス・カニス>が抜け落ちている)と呼ばれるが、その偉大さについてヴェネツィアのマルクス・パウルスが、私によってロンバルディア俗語からラテン語に訳された書に記している。彼は、ほとんど27年間にわたってタルタル人の地で暮らし、皇帝についての情報を手にいれ、その家臣となったのであった」。f.117c(同巻cap.89)「タルタル人の行

いと習わしについては、上掲のごとく小兄弟修道会ヨハネス・デ・モンテ・カルピノ〔コルヴィーノ〕修道士とヴェネツィア人マルクス・パウルの書から引いたもので充分であろう。もっとも、私によって俗語からラテン語に移し替えられた作品の著者であるマルクスのその書には、注目すべきこと驚くべきことなどたくさんの方が書かれてあるが、私は、キリスト教信仰の礎にとって明らかな例証となると見込まれる場合には、ここ本書においても無駄なく挿入することに決めた。しかし、それら地域の状況とタルタル人の風習についてその書に記されてある驚異は、簡略のため挿入することを省いた」。

『年代記』の中に転載されている章は、それと対応する通常のポーロのテキストの箇所とはっきりと異なり、何よりもまず、ピピーノが自分の訳に基づいたのではなく、かつてすでに別の機会に訳していたオリジナルに戻り、それに新たな別の解釈を加えた、ということが考えられる。私の知る限りの全ての稿本に伝えられているテキストは、それらの箇所でひどく簡潔であるのに対して、『年代記』はそのヴェネト語原典を厳格な忠実さであらゆる細部まで写している。またピピーノのマルコ・ポーロには、後で取り上げるが一ボヘミア語訳があり、これらの章において『年代記』とぴったり一致する。この一致は、それらの章が今に伝えられている簡略な形はオリジナルではなく、それらにおいてもピピーノが十分に典拠に忠実であったことの証拠となりえる。(図3)

Monaco ミュンヘン — 国家図書館に4本。

(24) Cod.lat.5339, ff.214r-280r. ソリヌス他との雑録集、15世紀。結び「・・・フィレンツェにて主の1442年教皇エウゲニウス4世御世第12年12月14日了」。

(25) Cod.lat.18624, ff.150-163. 雑録集、Tegernsee修道院より、Pの部は同院Oswaldus Nott di Tittmaning修道士作。全体の転写ではなく一連の慌しい要約。

(26) Cod.lat.850, ff.7-71. 紙、15世紀。ピピーノ自身の*De locis terre sancte*「聖地記」他も含む。写字生は最初にマルコの書の内容が信頼に値するものであることを論じており、その証拠としてピエトロ・ダーバノの著名な二つの証言を引いている。

(27) Cod.lat.249, ff.153-90. 上記(26)の忠実なコピー。Liber doctoris Hartmanni Schedel de Nurenberga<ニュルンベルグの医師ハルトマン・シェーデルの書>との書き込みあり。

Napoli ナポリ

(28) ウィーンのパラティーナ図書館旧Ms.3273が、戦後ナポリの現国立図書館に収められたもの。P単独、cc.105、紙、134x185, 2欄組、14世紀末か15世紀始め、装丁羊皮紙、職業写字生、保存状態劣悪。タルタル人軍事組織の章あり。

1902年G.V.Prasekによって後述ボヘミア語訳の脚注に刊行された。

Oxford オックスフォード

(29) Merton College図書館Ms.CCCXII, ff.1-56. 羊皮紙、小型版、2欄組、14世紀。

Parigi パリ — 国立図書館に4本

(30) Nouv.Acq.lat.1768. 羊皮紙、ff.21よりなる。全てのP写本中最も古いものの一つ。Pの約3分の2を含むが、私の見るところ異なる手の三つの断簡よりなる。パリのドメニコ会修道院より1897年9月購入。

(31) Ms.lat.17800. P単独、ff.46, 14世紀、羊皮紙、2欄組。(図4)

(32) Ms.lat.6244 A, cc.122. マルコに始まる雑録集、1439年作。c.122「・・・私Helias de Bosco Florentieが、高貴にして思慮深き殿Magister Jacobus Finalis、我らが至聖の教皇エウゲニウスの守護者のために、その第9年に書けり」。f.122に書き込み：「私iacomo barbarigoマルコ・パウロの本書を読み、その述べている多くのことが事実であることを発見した。そのことを私は、長きにわたってかのインドの地にあったヴェネツィア人ニコロ・ディ・コンティの報告記や、同じく私が言葉を交わした多くのムーア商人たちに基づいて証言する」。

(33) Ms.lat.1616, ff.CCCVII-CCCLXXX. 私見では15世紀それも末、おそらくイタリア作。ペトラルカ、ポッジョ・フィorenティーノ、レオナルド・ブルーニらイタリア作家の作品が主。マルコの後にプレスビテル・ヨハンネスの書簡がくる。(図5・6)

Praga プラハ

(34) San Vito司教座聖堂図書館に、*Marci Pauli de Venetiis de conditione et consuetudine orientalium regionum*「東方諸地の在り様と習わしに関するヴェネツィア人マルコ・ポーロの〔書〕」なる1本が在る。

同図書館カタログによると、さらに次の2本が存在する。

(35) Cat.II,96,n.1012, cc.86a-131b. 15世紀、雑録集。巻頭に書き込み「・・・私Johannes de Duba,主の1436年Zitavia亡命中本書を編ませ、聖プラハ教会に遺贈する」。

(36) Cat.II,100-1,n.1021, cc.1a-43a. 雑録集。

これら2本は上述Prasekに用いられた。

Roma ローマ — ヴァティカン図書館に6本

(37) Ms.Vat.lat.3153. P単独、ff.68, 羊皮紙、1欄組、164x320, 14世紀。最初の保護紙裏に「1420年4月19日」とあるが、同写本に関わるものか不明。

(38) Ms.Vat.lat.5260. P単独、cc.96, 紙小型版、140x210, 1欄組、おそらく15

世紀後半。軍事組織の章あり。

(39) Ms.Vat.lat.7317. 雑録集、Pはff.301-373,18番目の作品。巻末に転記者「コロニア〔ケルン〕の聖職者Arnoldus Meheter de Werhs」、枢機卿Firmanoのために作成、「主の1458年4月27日木曜日、インディクティオ第6年、教皇カリストゥス3世御世第4年」。ここにも、パリ写本6244(32)と同じバルバリーゴの書き込みが転記されている。

(40) Ms.Ottoboniano lat.1875, ff.7r-67v. f.64を欠く。前(ff.4r-6v)に多数の固有名詞のリスト。軍事組織の章あり。最後の余白に「Johannes Magnus Gothus Lincopensis, 主の1520年8月ローマSancta Brigidaの館にて記す」。

(41) Ms.Ottoboniano lat.1641. P単独、cc.114, 紙小型版、138x202, 15世紀。写字生の書き込み「己が手で書き写せる者に幸あれ。Henricus de Busco (またはBusto) de Brabantia書写」。所有者の中にDionigi Atanagiの名がみえる：「本書は、ローマにあったClaudio Tolomei猊下が所持品を全て処分し、ピアチェンツァにお戻りになるおり賜った。私Dionigi Atanagi自らの手で」。

(42) Ms.Regina 1846. P単独、cc.103, 紙、198x267, 北方人の手、15世紀。軍事組織の章あり。

(43) コルシニアーナ図書館Cod.1111. 紙小型版、cc.1-59v, おそらく16世紀初。バルデッリ-ボーニとラザリはトスカナ語写本に、ユールはイタリア語写本 (n. 58) に分類するが誤り。

Stoccarda ストックホルム

(44) 王立公共図書館Ms.in quarto 10, ff.4-124.15世紀、ピピーノの「聖地記」が続く。

Venezia ヴェネツィア

(45) マルチアーナ図書館Ms.3307 (旧Ms.lat.cl.X,128). P単独、cc.183, 紙、15世紀。

(46) 同Ms.3445 (旧Ms.lat.cl.X,73). P単独。1465年「医術師Joannes Marchanova de Venetiisの求めにより」作成。彼は翌年それをパドヴァのS.Giovanni di Verdara修道院に寄贈し、後にそこからサン・マルコ図書館に移管された。そのためミューラーとマースドゥンはパドヴァ在とするが誤り。

Vienna ウィーン

(47) 国立図書館Ms.12823 (supp.16), ff.1-101b. 14世紀、雑録集、羊皮紙。

Wolfenbuttel ヴォルフエンビュッテル

(48) 公爵図書館Ms.Gud.lat.3, ff.30-73. 羊皮紙、15世紀。

(49) 同Ms.Weissenb.40, ff.1-57. 紙、15世紀、オドリーコ、リコルド・ダ・モ

ンテクローチェ他を含む。

これら二つについてはレッシングが取り上げ、多くの稿本に欠く第60章（タルタル人軍事組織）を後者から採録しており、ミューラーが用いたベルリン写本(1)より優れていることを証明している。

Wurzburg ヴュルツブルグ

(50) 大学図書館Ms.F.60, cc.262r-304r. 紙、15世紀半ば頃、2欄組、各36-38行。
タイトル *Marcus Polus Venetus de mirabilibus mundi* 「マルクス・ポルス・ウェネトゥス世界の驚異について」。ピピーノの序文はなく、ヴェネツィア出発の章に始まり、聖トマスの章に終わる。最初の紙に、医師Nicola Hornと神学者Giorgio Hutter(ともに16世紀後半)の名がみえる。

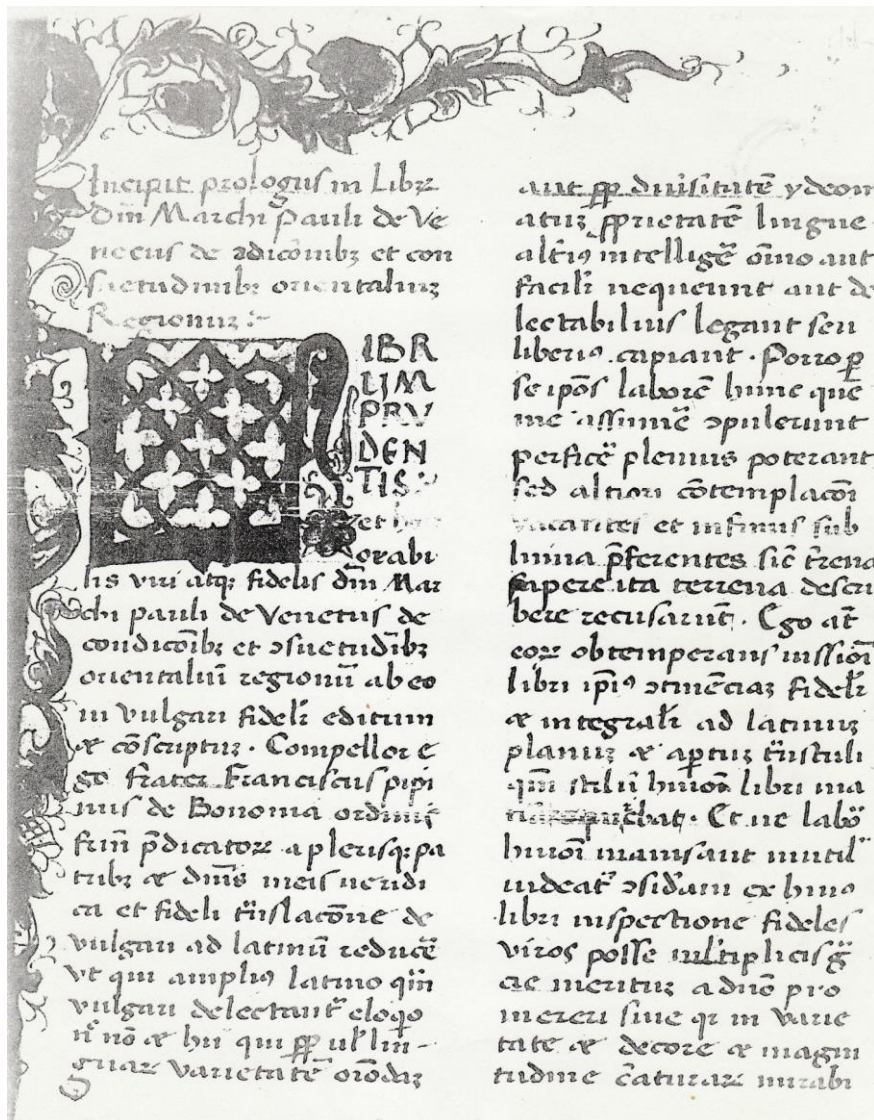


図1 (8) Firenze, Ms. Riccardiano, 983+2992, f.1r (最初のページ)

Napit prologus i libri dñi. archiepiscopi pauli
de venetiis de conditioibz i consuetudinibz
orientalium regionum

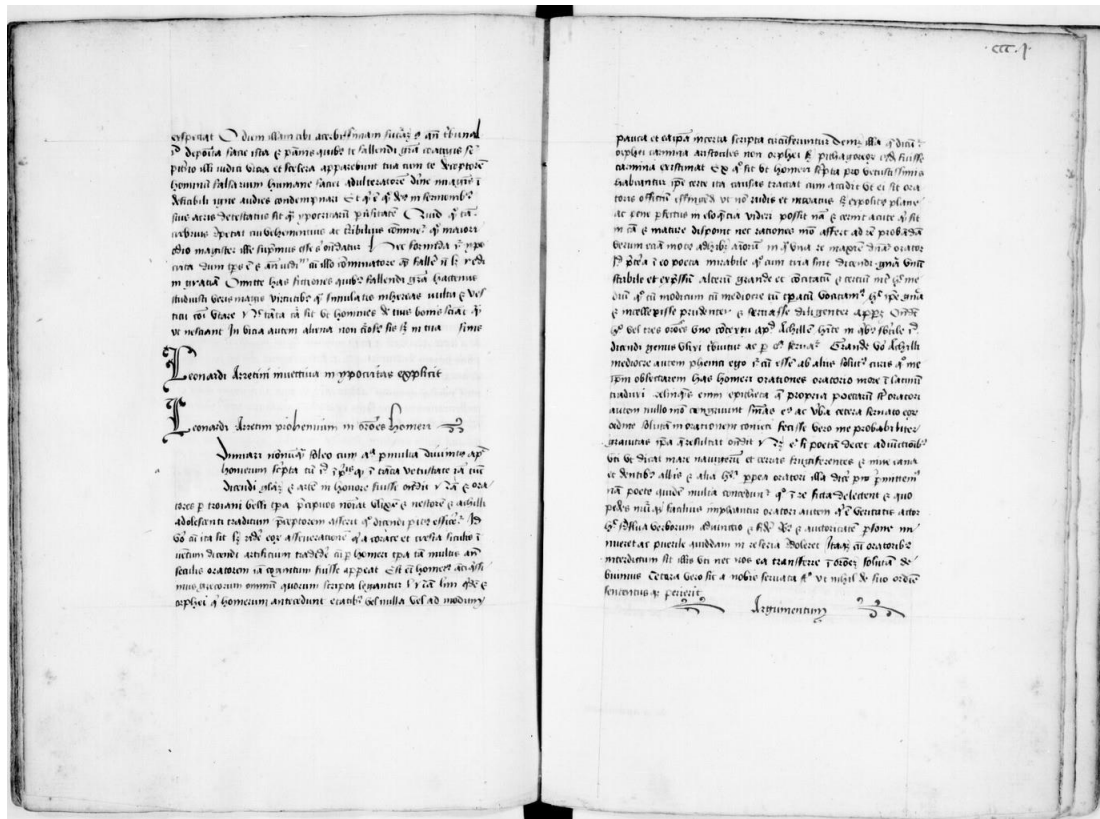
Iste prudentis honorabilis ac fide-
lis viri dñi archiepiscopi pauli de vene-
tiis de conditioibz et consuetudinibus
orientalium regionum ab eo in vulgari fi-
deli edmi et cōcepti cōpellor ego frater
francesco ppinus de Bononia ordis fra-
tri p̄dicatore a plenis p̄bri et dñis mos-
uendica et fidei nūlatōe de vulgari ad
latini reducere ut q̄ amplius latino q̄ vulga-
ri delectat eloq̄o nōrio et hu q̄ illis p̄p̄ in-
gari uarietate cōdā aut p̄p̄ dūsticatem
p̄dionari p̄p̄tē lingue alio intelligere
ōio aut facili nequeat aut delectabili le-
gunt seu libera capiat. Porro p̄ seipso labo-
re hūc que me assidue cōpuleret p̄fide ple-
nis p̄p̄tē si aliorū cōp̄latōi uacātes et
nūstis sublimia p̄fereat sicut nūstis sapien-
tia cetera delectat uacatū. Ego autē eorū ob-
tēp̄no uisioni libri ip̄ia cōmēcā fidelit̄
et integritate ad latini planū et ap̄m nūl-
tū que hūc hūc libri māia requēbat et
ne labor hūc iāno aut iūstis uideatur
cōfideam et libri p̄ m̄p̄tē fideles uirū p̄f-
se m̄p̄tē cū nūstis ad dñe p̄uenerit sicut q̄
i uarietate decore et magnitudine cūstū nūstis
būla dei opa aspiciētes ip̄ia p̄uenerit iūstis
et sapiēcā uocabiliū admittat. Aut uide-
tes gētes p̄p̄las tāu cōmēcā tenebūstis
tūc cūstis sordidū iūstis ḡas dñe agat
qui fideles suos luce uirūstis illūstis de tā
p̄p̄tē tenebris uocare dignat̄ ē i admi-
rabile lūmē suū seu illos ignorāte cōdōi-
tes p̄p̄ illūstis cōdōi ip̄os dñm p̄a-
būt uel inducitorū cūstis delecta cōfideat

q̄ fideles ip̄i p̄p̄tē hūc ad cōmēcā
similitudine q̄ ad uen dei cūstis p̄p̄tē hūc p̄i
m̄ et hūc q̄p̄i hūc cōmēcā illūstis sicut
etia religioz aliquez cōdā p̄uenerit po-
terit p̄p̄ ap̄tate fidei ip̄iane ut nōmē
dñi dñi x̄ m̄ tāu m̄p̄tē p̄p̄tē cōmēcā
tūstis delectat ip̄i fūctē dñis ad p̄p̄tē
cātas m̄fidelū nācōs ubi m̄p̄tē q̄mēdā
m̄p̄tē ē op̄ari nō pauca. Ne autē iūstis
m̄p̄tē atq̄ nobis m̄fidelū q̄m libro hūc illos
p̄p̄tē referit i ex p̄o lēti iūstis iūstis u-
dōmē cūstis m̄ cō lēgēti iūstis p̄p̄tē
dñm archiepiscopi hūc a uacatū uacatū
uiri et p̄p̄tē fideles i dñoni atq̄ p̄p̄tē
ne m̄p̄tē aduocati a cūstis cūstis dñis
tēstōm tēstis hūc ut m̄p̄tē iūstis
m̄p̄tē sit ip̄ia uacatū fideles. Hūc at-
cio dñs Nicolaus cōmēcā uacatū uacatū
similit̄ referat. Patruus nō ip̄ia dñis
thrus aut m̄p̄tē liber iste uacatū
m̄p̄tē dñis et sapiēs i m̄p̄tē cūstis
cōmēcā cōfessōi suo m̄p̄tē cūstis
cōmēcā fūctis affertur hūc hūc uen-
tū p̄p̄tē cōmēcā. Porro q̄ dñs m̄p̄tē
nōmē ip̄ia laborē affertur cōmēcā uacatū
cōmēcā legentū et ad laude dñi hūc
cūstis uacatū et iūstis cūstis
liber autē iste i m̄p̄tē dñis q̄ p̄p̄tē
capla dñis quoz libere p̄p̄tē ad fū-
cūstis cōmēcā nō ip̄ia iūstis hūc capla
tūstis p̄p̄tē. Cōmēcā p̄p̄tē
Cōmēcā capla p̄p̄tē

Inapiūt capla p̄p̄tē
Qualit̄ et quare dñs Nicolaus pauli de vene-
tiis et dñs archiepiscopi trāsierit ad p̄p̄tē
ontales. i. caplin.
Qualit̄ fecit archiepiscopi m̄p̄tē cūstis ad

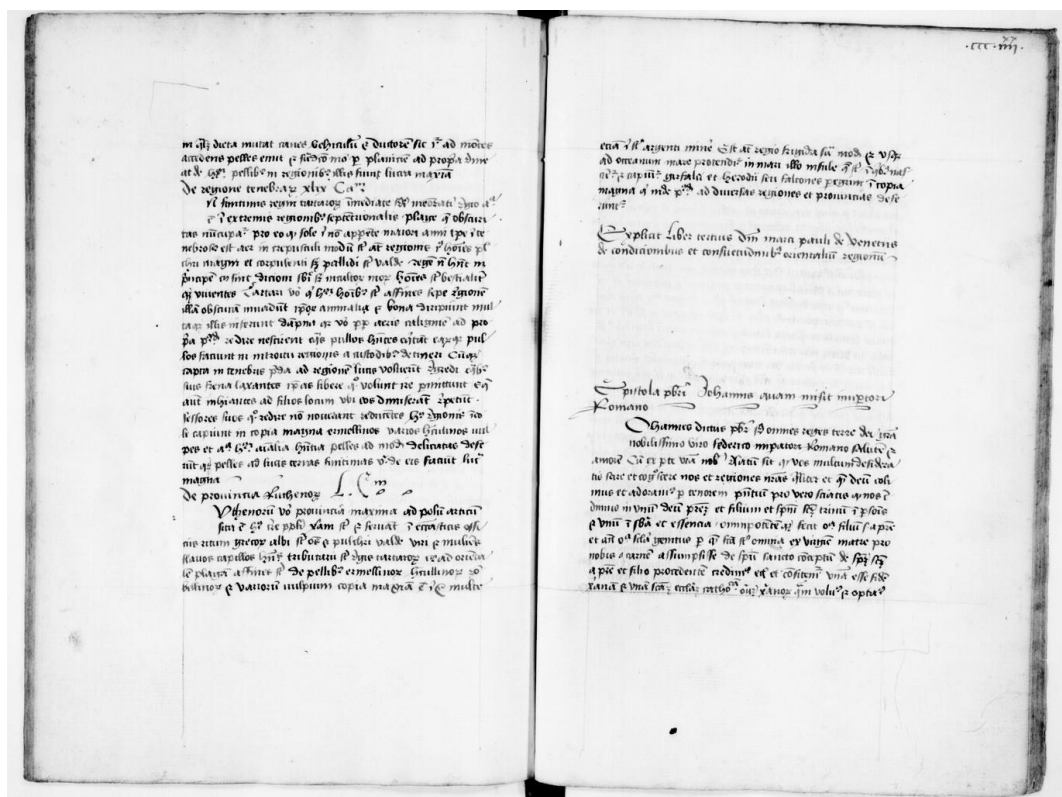


R. D. 155.



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France, Département des manuscrits, Latin 1616

図 5 (33) Paris, BNF Ms. lat. 1616, ff. 300v-301r (ポーロ冒頭箇所)



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France, Département des manuscrits, Latin 1616

図6 同上 ff.379v-380r (ポーロの最後とプレスビテル・ヨハネネスの書簡の最初)

かつてWalckenaer男爵の所蔵になり、ルーが自分のF〔フランス地理学会〕版に付録としてつけた固有名詞の対応表に用いられた稿本がいったいどこの図書館、おそらくアメリカか、に行ってしまったのか我々は知らない²⁾。第3巻に落丁があり、挙げられている50章のうち17章しかないにしても、これに関して知られている僅かな情報からして、充分注目されるべきものと私には思える。14世紀の羊皮紙四折り版、2欄組、綺麗な仕上げ、様々なものが収められており、前にヨルダヌス修道士の「驚異」、続いて「エルサレム史」抜粋、一「管区報告」、「トゥルパンの書簡」、「アイルランド地誌」がある。タイトルは、「マルクス・パウルス東方の地の風俗習慣について」のようである。1853年4月27日、406フランで売却されている。

Sanderusが「貴人Joannes Gilsenus Bultellii Nipaeiの図書館にあり」と記載している稿本(*Bibl.belgica manoscrupta*,1661,p.284)が、上に挙げた写本のどれかに該当するのかそれとも失われたと見なすべきか、やはり分からない。Quetifは前掲書(p.541)で、サンデルスの言う版が本当にピピーノのものであって誰か他の訳者のものでないか明らかにすることを、同地の研究者に委ねている。しかしその書をサンデルスが、「東方の地の在り様と習わしに関するヴェネツィア人マルコ・ポーロの書」と呼んでいることからして、そうであることは疑いない。四折り版の羊皮紙稿本だった。イブレスの詩人Jean-Guislain Bulteelの写本は、Nieppeの君主Michel-Etienne Bulteelの書庫に入り、その蔵書は1658年アントワープで売却された。

ピピーノの「極めて鮮明な・・最良のものの中に数えられるべき」一本が、ソランツォの大コレクションの中にあった。フランチェスコ・メルキオーリの「四折り版写本カタログ」から、ポーロのテキストがその第424番の最初の104葉を占めていたことが知られる。ピピーノの「聖地記」(cc.105-117)と「七賢人物語」(cc.118-135)がそれに続いていた。書き出し〔略〕。結び「〔前略〕説教師修道会のボローニア市民フランチェスコ・ピピーノ修道士が、真実そのものであり全て真実が記されてあると確信して、俗語から文法に則った分かりやすい優れたラテン語に訳した書の第3巻、ここに終わる。神に感謝を、アーメン」。メルキオーリは巻末の貴重なノートも転記している：「私Johannes de Saxoniaによる書ここに終る、1407年三王への御公現の日前夜1月5日ベルガモ市にて、神に感謝を」。この稿本は、後に修道院長ルージ・カノニチの著名な蔵書に移り、さらに1836年Walter Sneyd師に売却されたが、そのコレクションが散逸した1903年まで変遷がたどれる。そのおり印刷された売却カタログのn.480がそれである³⁾。

枢機卿ズルラはすでに何度も引いたその書の中で、ピピーノの一本を所有していることを誇っているが、その写本がその後どうなったか、上述リストのいずれかに該当するのか不明である。

コルディエのリスト(t.II,p.549,n.81; ibid.,p.526)は、Mentz<メンツ>の首都大司教座聖堂修道院の所蔵になるPの一本を挙げている。(Maintz<マインツ>の名がこのような奇妙な形になっていることも当然注目すべきである。) Pの一テキスト、「すこぶる優美な字で書かれた」写本旧ms.LIIが、実際マインツの司教座聖堂図書館に存在していたが、今はGudenus自身によってカタログに転記された数行(序文と第1章)しか残っていないことはほぼ確実である⁴⁾。1793年敵の占領から市を解放するために行われた戦闘で、同図書館は炎によってほとんど完全に破壊され⁵⁾、生き残った僅かな写本の中にマルコの書は姿を見せない。現市立図書館にもない。現在の聖堂図書館にも司教神学校図書館にもその痕跡を止めていないようである。

前掲リストに、前に述べたパリ国立図書館ms.lat.3195を付け加えることを忘れてはならない。どのようにしてピピーノの版がトスカナ語版と融合し、TAの欠落のためその無名の改作者にとってPが唯一の典拠となっている箇所で、その文体がいかに奇妙なふうに低調で粗野なものになっているかを、いくつかの例をあげて証明するのは大いに興味深いことであろう(cfr.例えばLTの第43章, pp.406 sgg.)。しかし本書の目的にとっては、LTはPの一反映であって、とりわけユールに対する敬意から余りにも頻繁に主張されるごとく、Pに基づいた「イタリア語訳」そのものから単に由来するものではないこと、これについてはいささかの疑いもないことを想起するだけで充分であろう⁶⁾。

2 俗語稿本

これから生まれた数多くの重訳ものもまた、ピピーノ・テキストの広範な成功を証している。印刷の発明がラテン語テキストに新たな拡大をもたらす前に作られたフランス語、アイルランド語、ボヘミア語、ヴェネト語の写本がそれぞれ一つ今に伝わっている。また、ラテン語印刷テキストとは関係なく何らかの手稿本にもとづいて作られたポルトガル語印刷本がある。ラテン語刊本から生まれた多くの翻訳刊本の他に、手書きのまま刊行されていないドイツ語訳も一つ今に残っている。二つのフランス語刊本の一つには、その手書きの写しもある。

印刷本より前の、あるいは印刷されたラテン語版とは独立した版から始めよ

う。

フランス語訳は現在二つの写本にみられる。大英博物館ms.egerton 2176とストックホルム王立図書館ms.XXXVIIで⁷⁾、極めて密接な類縁関係にあり、どちらも北フランスかフランドルでおそらく15世紀後半に作られたものである（後者は16世紀の可能性も排除できない）。ストックホルム稿本の結びは次のようにある：「東方の主な地域の在り様と習わしについてのヴェネツィア生まれマルク・ポール殿の書ここに終わる。本書は、ブロン聖堂区すなわちブルターニュのサン・マロ・ド・イール教区生まれの僧ギョーム・ゴーヴェンGuillaume gauvainが書けり」。一方ゴーヴェンの名は、作品そのものとどのような関係にあるかはっきりしないが、ロンドン稿本の表紙の内側の面の一つにも記載されている：「ブロ [ン] すなわちフランスにおけるイギリスのブルターニュのサン・マロ教区の僧ギョーム・ゴーヴェン」。その下に同じ手で、「イギリスのフランス王にしてブルターニュ公万歳」と、奇妙な歓呼の言葉が記されている。これからいくつかの仮説が可能であるが、なかでもゴーヴェンが翻訳した当人であり、ロンドン稿本——美しい羊皮紙写本、章の冒頭にたっぷり金を使った豪華な細密画、f.8rにフランスの楯、装丁の内側に‘フランソワ・ド・ヴァロワ’の署名——この稿本が、ある特定の君主への訳者からの贈り物だったということも考えられる⁸⁾。もう一つのコピーの方は宛先がはっきりしており、全巻を書いたと同じ手が上に引用した結びに次のように付け加えている：「本書は、誉れ高き御方にして賢明なる閣下、パリの城における我らが国王の会計院院長 iehen gilbertイアン・ジルベール師の所有になるものである」。内容の点ではこの作品はほとんど何の価値もなく、おそらく劣悪な一ピピーノ・テキストに基づいたものであろう。その芳しからぬ忠実さと極めて凡庸な芸術的価値がどのようなものであるか理解するには、書き出しと結びを見るだけで充分であろう⁹⁾。

Treshonorable homme prudent et saige missere marc paoul natif de la cite de venise passant et tournoiant les parties de orient pour causes raisonnables en la conpaignie de son pere missire nicole paoul et de son oncle missire mathieu, hommes de grand honneur et de sainte vie, voulut curieusement enquerir des coustumes merveilleuses et diverses condicions et usaiges de regions et parties de orient pour dicter et escripre ce present livre. [以下略]

「いとも誉れ高き御方、ヴェニズ市生まれの思慮深くも賢明なるマルク・パウ
ル殿は、大いなる名誉と敬虔な暮らしの御方である父ニコル・パウル殿と叔父
マシュー殿に伴って、しかるべき事情により東方の諸地に往来し、東方の諸地

域諸部分の驚くべき風俗と様々な状態と習慣を興味深く調べ、本書を口述し記したのであった」。

Ilz ont plusieurs minieres de argent et grant multitude de peaux de armelins de herculins de vares de zambelins et de renars. Ceste region est tres froide et contient de estente jusques a la grant mer. Il a en ceste mer aucunes isles ou l'en prent plusieurs giraffes et faulxcons sauvaiges que l'en porte en diverses provinces.

「彼らは多くの銀鉱と大量の貂・エルキュラン^{3*)}・栗鼠・黒貂・狐の皮を有している。この地方はとても寒く、大洋に至るまで広がっている。その海にはいくつかの島があり、そこでは多くのキリン[ハヤブサ]と野生の鷹が獲れ、様々な地方にもたらされる」。

名高いbook of Lismore<リズモア本>、異なる手になる羊皮紙雑録集、15世紀後半作、リズモア城所蔵、これのff.79a-89dにポーロのアイランド語要約が含まれている¹⁰⁾。冒頭と最後を欠く。おそらく訳者は、すでに断片となっていたか大きく短縮されたテキストを前にしていたのであろう。事実、マルコの書のことをタルタル人の書のように語り、ラテン語に訳した者をアルメニア人ヘトゥムと混同して結び付け、「聖フランチェスコの衣をまとい、数カ国語に通じ、フランキスクスと呼ばれた」その王の一兄弟としている。普通のテキストなら最も素朴な読者でさえごまかされぬような誤りである。

プラハ博物館cod.III E 42(旧III F 26)は、マンデヴィルの旅行記とともにマルコ・ポーロのボヘミア語訳を含む¹¹⁾。稿本は15世紀のものだが、我々が知る唯一のものであるその[ボヘミア語]訳はさらに古いものである可能性もある。編者の言によれば、レトヴィチェで作られ、モラヴィアの一修道院に所蔵され、しばらく後そこからプラハの公立図書館に移った。どのようにしてだか分からないが、ヴェンチェズラオ・ハンカVenceslao Hankaの蔵書に入り、その死とともに博物館の稀覯本となって現在そこに所蔵されている。126葉からなるはずだが、今はその内最初の2枚を含む7葉が欠けている。訳者については何も知られない。底本がピピーノであったことは近代の編者には疑いなかったようで、実際彼はその中にボヘミア語テキストの註と、フラ・ピピーノの版も対訳として載せている。もしこの結論が、テツァもそうみなすごとく正しいなら、このボヘミア語訳はピピーノ・テキストの歴史にとって著しい重要性を有しており、今に伝わるピピーノの稿本がある点でそのオリジナル版よりさらに要約的であることの証明となるであろう。このボヘミア語写本の語る‘山の奇跡’についての物語は、フラ・ピピーノが私の知る写本の中で語っているものより

ずっと詳しく豊かである。テツァは、この話のイタリア語訳(抜粋pp.8-10)を発表し、ボヘミア語訳がフラ・ピピーノから離れている新たな細部への確認をポーロの他の版に見いだそうと試み、ポーチェとラムージオにそれを求めているが、説得力を欠く。彼が翻訳している箇所はVA、すなわちPの典拠にまさしく忠実に対応する。したがってその結果、ボヘミア語訳の基に、もともと自分の典拠により近いPか、それともPに似ているがそれとは異なるVAの別のラテン語版の反映があったことを証明している。ピピーノ『年代記』のポーロの箇所についての考察からすると、我々はこれら二つの仮説のうち最初の方に傾く。

一無名氏がマルチャーナ図書館ms.6140(旧Ital.cl.VI,n.56)の中に残したヴェネト語訳は、単なる興味程度の価値しかない^{1 2)}。15世紀前半の凡庸な作品であるこの小稿本は、ポーロの書(ff.1r-74r)のほかに、聖地に関するピピーノの小品のヴェネト語訳も含んでいる。訳者がどのような人物かは、序文の文章から十分に明らかである。そこではピピーノが、少数の者にしか歓迎されないし理解されないもとの方言に代えて教会の麗しい普遍語を採った、と述べている理由を繰り返さなければならないはずなのだが。(図7)

Per pregi de molti nobili et savii signori i' o volgaricato questo libro de lo savio et honorevole homo e fidele signore miser Marcopolo de Venesia de le conditione e de le usance de le regione de oriente. Conciosiacosa che molti se deletano piu de lecere in volgare che per gramadega. Et aco che la fatica de questo translate non para vana et desutele i' o considerato che per lo lecere de questo libro li fideli homeni possano ricevere merito da dio de molte gratie per co ch' eli vecando le maravigliose operation de dio se porano molto meravigliare de la sua vertude e sapiencia e vegnudi (sic) che tanti povoli pagani sono pleni de tanta tenebrositate de orbega e de tante sporchece li cristiani regratiano dio lo quale a illuminado li suoi fideli de luse de veritade, ha designado de trare quelli de cosi pericolose tenebre e de menarli a la sua cosi maravegliaosa lume (sic).

「多数の高貴にして賢明なる御方たちのために私は、賢明にして誉れ高き方であり信仰篤き御方であるヴェネシアのマルコポロ殿の、この東方諸地の在り様と習わしに関する書を俗語になおした。というのも、多くの者はラテン語よりも俗語で読むことを歓ぶからである。この翻訳の労苦が虚しく無駄なものと思えぬよう私は、本書を読むことにより、敬虔な人間は神から多くの恵みの加護を賜うことができようと考えた。なんとなれば、神の驚くべき御業を見てその御力と御知恵に大いに驚嘆することができ、かくも多くの異教の民がかほど

の盲目と汚濁に満ちているを知って、キリスト教徒は、己が信徒を真実を照らし給い、有り難くもかくも危険な暗闇から引き出し、そのかくも嘆ずべき御光へと導き給う神に感謝するであろうからなり。」

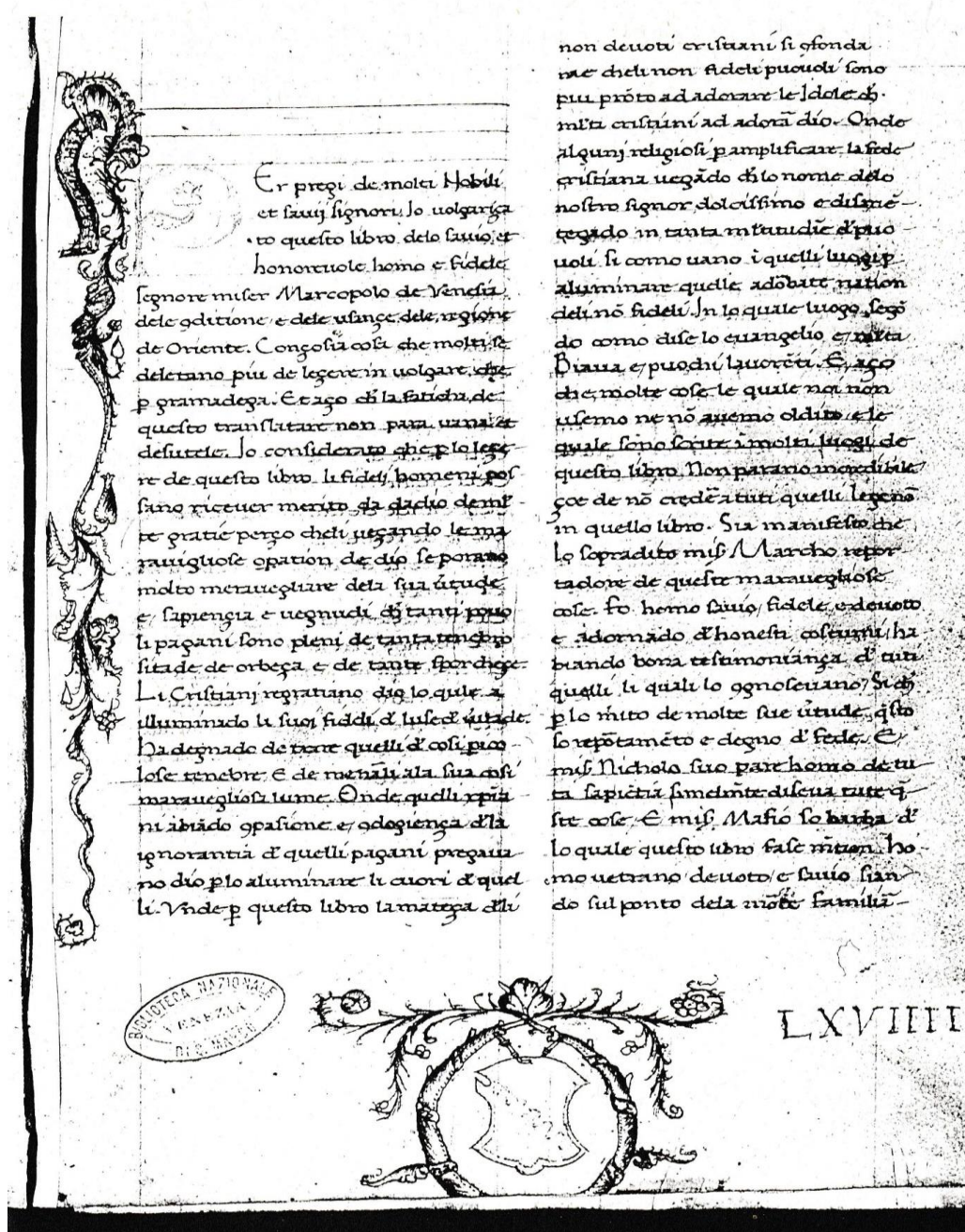


図7 Venezia, Bibl. Marciana, Ms. 6140, f.1r (最初のページ)

今に伝わる最も古いポルトガル語訳、「1502年2月4日いとも高貴なるリスボン市において」フェルナンデスの仕事と活字によって出たものは、すでに述べたごとく印刷テキストとは無関係である¹³⁾。フェルナンデスは、マルコの書とともにニコロ・デ・コンティの手記と、「インディアスの全てを書いた」ジェノヴァ商人ジロラモ・ディ・サント・ステーファノの手紙を訳した。エレオノラ女王の侍従で、その偉大な夫エマヌエレ1世の献身的な崇拜者であったヴァレンティノ・フェルナンデスは、当時ポルトガルを帝国の絶頂へと押し上げつつあった偉大さと発展の精神にすっかり染まっている。「泰然かつ無敵極まりなき王にして殿ドン・エマヌエレ、はたポルトガルならびにアルグアルヴェス・ダクェム、アフリカなるアレンマルの初代国王、ギニアの殿、エティオピア・アラビア・ペルシャならびにインディアの航海および通商の征服の主」への彼の献辞は、ポルトガルの力とオリエントの富の麗しい賞賛である。その翻訳は、当時の輝かしい地理的拡大と相呼応せんとし（「いとも高貴なるテンドック、マンジ、タングート地方・・・それらは最初、私の乏しい知識によれば、いとも誉れ高き貴族Gaspar Cortereal殿が発見したのであった」）、最後のところで、同書の中で扱われている地域に出かける者すべてに、諸地の正確で近代的な名前と各地間の正確な距離を手に入れてくれるよう頼んでいる。ポーロの作品の真実性については編者は、同地でのとても興味深い経験から確信する。ほかならぬリスボンの町で次のようなことを耳にしたと、「いとも思慮深き王」に想起さすのである：「本書はヴェネツィア人が長年宝物庫に隠してきたものであり、殿下の今は亡き追憶の叔父ドン・ペドロ王子が、ヴェネツィアでその宮廷から盛大な歓迎・・・を受けたさい、彼らは・・・今述べたマルコ・パウロの書を大いなる贈り物として王子に捧げたのでありました」¹⁴⁾。同書は印刷はとても美しく、訳も比較的注意深く行われている。



Frontispizio della versione del Santaella (Siviglia, 1503)

図8 Santaella版（セヴィリャ、1503）の扉絵

1582年、すでにラテン語テキストの印刷本が増えてきた頃、ピピーノ版がバヴァリア公ウィルヘルムのために、「シュトラウビングの国家書記」シモン・シュヴァルツによってドイツ語に訳された。羊皮紙の美しい装丁のかかった丁寧な字体のこの132葉からなる写本は、バヴァリア選帝公図書館に埋もれていたものだが、現在のミュンヘン国家図書館cod.germ.937がそれである。私が出くわしたいくつかの面白くない出来事からして、それがもっと輝かしい運命を持たなかったことを嘆くまでもない。訳は凡庸である。余りにも頻繁に訳者は、学問的俗物性からかそれとも十分に理解できなかったためか、ラテン語をそのままにしている。お手軽な博識のいっぱい詰まった公爵への長大な献辞(cc.2-12)と、訳者が自分の水ぶくれした学識をついでに吐露している「読者への前口上」(c.14)は、何の価値もない。また、そのタイトルは大仰極まりない：[略]。

シュヴァルツはその訳をグリナエウスのテキストに基づいているが、グリナエウス版についてはすぐ次に取り上げる。

ジュネーヴの公共大学図書館の写本の中に、後述する1735年ハーグで出版されたフランス語版「マルコ・ポーロ」のとても優美な転記がある。Ms. suppl. 883である。転記者ジャック・ヴィヴィアン(1830-1899)は、きっと新たな版を作ろうと意図していたのであろう。旧版に地理学会テキストの最後の数章を加え、その上豊富な興味深い地図を付けている。

3 印刷テキスト

フラ・ピピーノのラテン語訳は、1485年頃ほぼ確実にアントワープでG.Leeuの活字で初めて印刷された^{15) 4*)}。この版は内容の点ではきわめて出来の悪いもので、無数の誤りにあふれており、しかもおそらくその全てが底本として用いられた写本に帰されるわけでもない¹⁶⁾。(図9)

In nomine dñi nri ihu xpi filij dei nri et veri amen.
Ancipit plogus i libro dñi marci pauli de venecijs de cō-
 suetudinibus et cōdicionibus orientaliū regionū



Ihu prudentis honorabil'
 ac fidelissimi viri dñi marci
 pauli de venecijs de cōdici-
 onib⁹ orientaliū ab eo in vl-
 gari editū et cōscriptū. **N**ō
 pelloz ego frater franciscus
 pepuñ. de bononia frñ pdi-
 catorū a plerisq; patrib⁹ et
 dñis meis veridica seu veri-
 fica et fideli translacione de

vlgari ad latinū reducere. vt qui amplius latino q̄ vlga-
 ri delectat̃ eloquio necnō et hij qui vel ppter linguarū va-
 rietatē omnimodā aut ppter diuītatē ydeomatū. ppta-
 tē lingue alterius intelligere oīo aut facilliter nequeant aut
 delectabilius legāt seu liberior capiat̃. **P**orro p seipōs
 laborem hūc quē me assumere cōpulerūt pficere plene nō
 poterant falciozi cōtemplacioni vacantes et infimis subli-
 mia pferentes sicut terrena sape ita terrena scribere recu-
 sarūt. **E**go aut̃ eoz obtpans iussioni libri ipius cōtinen-
 ciam fideliter et integraliter ad latinū planū et aptū trans-
 tuli qm̄ stilū hui⁹ mōi libri materia requirebat. **A**t ne la-
 bor hui⁹ mōi inanis aut inutilis videatur cōsideraui ex li-
 bri hui⁹ inspectione fideles viros posse multiplicis gracie
 meritū a dño pmereri. **V**ide qz i varietate decore et m̄gni-
 tudine creaturarū mirabilia dei opa aspicientes ipsius po-
 terant virtutē et sapienciā venerabiliter admirari aut vi-
 dentes gētiles pplos tāta cecitatis tñbrositate tātisq; so-

a 1

300 000000

図10 1485年のラテン語版、最初のページ（東洋文庫蔵）

この最初のものとは無関係に、1532年*Novus orbis regionum ac insularum veteribus incognitarum*『古人には未知の島々と諸地域の新世界』のpp.287-365に二番目の印刷版が出版され、しかもはるかに大きな成功を収めた。この著名な集成本は、Simone Grynaeusシモン・グリナエウスの名を冠してはいるが、実際はGiovanni Huttichヨハン・フッティヒの手になるものだった。実際グリナエウスが「献辞」の中でそう述べている。フッティヒが前にした写本も、アントワープの印刷者に用いられたものよりさほどいいというわけではなく、これまた後世のものでひどく崩れており、それにタルタル人の軍事組織に関する第1巻第60章を欠いていた。彼は、内容の重大な変質よりも作者の文体的欠陥により敏感で、それを精力的な形式上の見直しのもとに置き、自分の人文主義的繊細さと衝突するところをすべて書き直し、大きく変えてしまった。そのため彼のテキストの中にポルトガル語訳からのピピーノの重訳、反響を見て取った者がいたほどである¹⁷⁾。私の知る限り、フッティヒがその単なる重訳者であると思えしえるような、それより前のピピーノ版があったと認めることを可能にせず写本はない。マルコの文体の貧しさに対する嘆きは、その書への短い序文の中であまりにも明らかである(p.287)：「〔前略〕このヴェネツィア人マルクスが、よりふさわしい訳者を得るか、それともそこそこでほのめかしているようにラテン語を知っていたのだから、自分の書をラテン語で書けばよかったのだが。ところが彼は、あまりラテン語に堪能でない同郷のヴェネツィア市民に飲ばれる方を選んだのだった」¹⁸⁾。(図11)

MARCI PAULI VENETI DE ORIEN-
TALIBVS REGIONIBVS. LIBER III.

397

Quales naues in India sint, Cap. I.



In hoc tertio libro Indiæ regionē descripturi, a nauibus eius exordium faciemus. Maiores naues quibus Indi per mare utuntur, ut plurimum de abiegnis factæ sunt lignis, habentq; solarium unū, quod nostrates naute operimentum uocāt, supra quod circiter quadraginta sunt mansiunculæ pro mercatoribus paratæ. Habet nauis una unū gubernaculum, quatuor malos & totidem uela. Tabulæ clauis ferreis firmissime compactæ sunt, & fissuræ quæq; stupa obfirmatæ. Et quoniam pice in his regionibus carent, linunt naues suas oleo cuiusdam arboris calce mixto. Sunt in magnis nauibus circiter ducenti uiri, qui eam remis per mare ducant. Capic uero nauis una quasi sex millia sportarum piperis. Adherent quoq; his magnis nauibus aliæ nauiculæ, quæ piscationi & ancoris iaciendis inserviunt.

De insula Zipangri, Caput II.

Zipangri insula in ako mari sita; distat à litore Mangi per mille millia, tria atq; quingenta, & est magna ualde. Habitatores eius albi sunt, & decentis staturæ, idola colentes, & propriū habētes regem, nulli tributarij. Est ibi aurum in maxima copia, sed rex non sinit illud extra insulam facile portari: & hæc causā est quod pauci mercatores ad illam concedunt prouinciam. Rex insulæ palatium habet magnificum, cuius tectum aureis operitur bracteis, non secus quā apud nos magnæ domus plumbo uel cupro operiuntur. Superficies quoq; superior aularum & conclauium aureis laminis dicitur tecta. Inueniuntur illic margaritæ in magna copia, rotundæ & crassæ rubei coloris, quæ albas in pretio & ualore longe præcellūt. Sunt quoq; ibi alij lapides pretiosi, qui unā cum auro insulam ditissimam reddunt.

Qualiter magnus Cham missis exercitu contendit pro insula Zipangri expugnanda, Caput III.

Magnus Cham Cublai quum audisset insulā Zipangri tantis pollere diuitijs, cogitare cœpit quomodo eā suo subiugaret dominio. Missis igitur duobus ducibus, quorū unus Abatan, & alter Nonsachum uocabat, duos magnos exercitus destinauit, qui eam expugnarent. Hi itaque à portu Zarten & Quinsui solucentes cum multis nauibus, & magno equitum atque peditum apparatu, nauigauerūt uersus insulam Zipangri, & ingressi in eam multa damna intulerunt uillis & castris in planicie sitis. Et antequam subiugarent insulam, ortum est inter eos perniciosum dissidium, ut neuter alterius obtemperaret uoluntati & consilio: quo factum est ut in nulla re prosperum haberent successum. Nam nec urbem aliquā, aut ullum castrum præter unū

L expugnare

図11 Novus Orbis (第3巻冒頭ページ、ジパングの章)

1532年3月バーゼルで「ヨハン・ヘルヴァギウスにより」、さらに同年10月パリで「熱烈なヨハネス・パルヴィとガレオトゥス・ア・プラートによって」（贅沢な印刷部数で、二人の刊行者によって分割されて）刊行された『*Novus Orvis 新世界*』が、著しい成功を収めたことはよく知られている。バーゼル版は1537年と1555年にさらに二つ刊行された。1534年にはストラスブルグで、ミヒャエル・ヘルがG.Ulricher von Andlaの活字でそのドイツ語訳を出し、1563年にはそのオランダ語訳がアントワープでCornelis Ablijnによって出た。『新世界』のポーロの部分はReiner Reineckによって、*Marci Pauli Veneti Itinerarium seu de rebus orientalibus*「ヴェネツィア人マルコ・ポーロ旅行記あるいは東方の事物について」とのタイトルで、*Chronicon Hierosolymitanum id est de bello sacro historia*『エルサレム年代記すなわちその麗しき聖なる歴史』（Helmaestadii 1585）の第2部、および*Historia orientalis hoc est Rerum in oriente a Christianis, Saracenis, Turcis et Tartaris gestarum diversorum auctorum*『東方史すなわち様々な著者によるキリスト教徒・サラセン人・トルコ人・タルタル人についての東方の物事の歴史』（Helmaestadii,1602）の第2巻に再録された。これらは二つの作品ではあるが、印刷上でもおそらく一つにされるべきものであろう¹⁹⁾。1671年には「Andreas Mullerus Greiffenhagius アンドレアス・ムッレルス・グライフェンハギウス」が、グリナエウスとライネッキウスの前からのポーロのテキストを、当時のブランデンブルグ選定公図書館の前に引いた稿本との照合による異読をいくつか付けて再版した。この版は、識者と一般読者から余りにも好意的に賞賛されたけれども、実質的に重要で新しいものは何一つもたっていない。

これら刊本からの翻訳は、ポーロの部分だけでなく『新世界』の地理編全体を訳した前述の二つ以外にも数多かった。

ラムージョが*Navigazioni e Viaggi*『航海と旅行』第2巻に収めたテキストは、全体としてグリナエウスの一翻訳と見なされるべきものである。この我らが博識家が、自分の版の基礎に据えたピピーノ訳を他のどのような版でもって補い改めようとしたかは、次章でみる^{5*)}。しかしながら、ラムージョの「マルコ・ポーロ」は何よりもまずピピーノの一翻訳であること、を忘れてはならない²⁰⁾。

1556年ラムージョとほとんど同じ頃、Francesco Gruget di Loches²¹⁾ がパリで三つの異なる出版社(Groulleau, Sertenas, Longis)からラテン語テキストの「フランス俗語」訳を出した：「東方インドの最も知られた都市と地方の地理記、その住民ならびにタルタル人の皇帝グラン・カンの支配下にある者たちの律法と風習」。この訳者は、フッティヒが自分の再版に許すいくつかの警告まで繰

り返している。彼もまた、マルコが手記をラテン語ではなく俗語で編んだことを嘆いた後——俗語への翻訳者にしてはなんとも滑稽な矛盾——最初の訳者のラテン語を、それがすでに手を入れられ推敲されたものであることを知らぬがまさに、鞭打つのである：「私もまた、M.ポールがより優れた訳者と出会うか、それとも（なん箇所かで明言しているごとく）ラテン語がとても堪能だったのだから、自ら旅行記をラテン語で書けばよかったのにとおぼえずにはいられない。そうすればその書の中で、ラテン語でもギリシア語でもない奇妙で粗野な言葉に出会うこともなかっただろう。おかげで私も、この翻訳を何度か突然中止しなければならなかったほどだ」。しかもその仕事の最後にいたってこの訳者は、マルコの作品を不完全だと考える理由を述べ、その書の不本意な断片性を読者に謝っている。

1601年サラゴサのアンジェロ・タヴァノのところから、クラモサの男爵にしてシエタモの君主云々のマルティン・デ・ボレア・イ・カストロの手になるカスティリア語訳が出た：「マルコ・ポーロ・ヴェネトによって集められ、ラテン語からロマンス語に訳され、ドン・マルティン・デ・ボレア・イ・カストロ云々によって多くの箇所を追加された東方地域のたいなることと驚くべきことどもの物語」。訳者がタイトルと序文の中で誇っている追加記事は、ポーロのテキストと混交しており、文学的観点からも注釈上からも何の価値もない。この訳は、稀でない誤解のみならず、原著の威厳に満ちた素朴さを感じずしてそれを飾りたてようという過度の自由と危険な野心によって台無しにされている。

ラムージョがピピーノ・テキストの姿を圧倒的に豊かなものに変えた後も、グリナエウス、ライネックおよびミューラーによって出版された古いテキストの成功が止められることはなかった。いくつかの翻訳が出、その中ではラムージョも考慮されたが、時たまかつ気まぐれで、彼の版のはるかに大きな新しさが認識されることも採用されることもなかった。MegiserメギゼルにしてもPurchasパーチャスにしてもそうである。前者についてミューラーは、この訳者の口上と表題のうわべだけの誓いの言葉に騙されて、「ヒエロニムス・メギゼルスは、ラムージョが出版したイタリア語テキストから Chrographia Tartariae 『タタルリア地誌』をつくった」と誤って書いたし²²⁾、パーチャスは序文の一つで、ラムージョの金のためにグリネウスの鉛を捨てたと、これに劣らず誤って誇った²³⁾。両者とも我々に提供するのとは、最少の追加を別にすれば相変わらずのピピーノである。Hieronimo Megiseroイエロニモ・メジゼロ（彼はあるイタリア語で始まる手紙でこのように署名している、1591年1月20日付グラーツにて、「いとも高名なる Giovan Giacomo Khisl、相続者カルトウンプルンのバロ

ン、クラニョとマルカ・スキアヴォーナの狩猟の師、ゴリーツィアの公伯爵領の相続侍従」宛）によって編まれたドイツ語の美しい小冊子は別の点で興味深い。彼がテキストの中に挿入している短い書き込みは、議論の余地はあるが、すでに注釈の始まりであり試みである。ラムージオからの挿入がより豊かなのはパーチャスの訳の方で、その版はとりわけ普及の広範さで注目に値する。

J.H.Glazemakerのオランダ語訳（アムステルダム 1664）は、レイネッキウスのテキストに基づく。1735年にハーグで出たフランス語訳はミューラーに拠っている²⁴⁾。



図12 最も古い印刷本（ニュルンベルグ、1477）の扉絵

4 フランチェスコ・ピピーノ・ダ・ボローニア

我々が今取り上げている版の作者ピピーノは、研究者に知られていないわけではない²⁵⁾。彼のものとしてはマルコの書のラテン語訳の他に、フランク人の起源からルクセンブルグのハインリヒ7世の死にまで至る、長大でいくつかの点で注目すべき歴史編纂物が今に伝えられている²⁶⁾。同書は、おそらくマルコ・ポーロの作品がえた好意の反映によってもあろう、ある種の成功を見た。そこには、彼が聖なる地への巡礼についてものした概略的な報告が何度も付け加えられている²⁷⁾。マルコの訳の序文と「聖なる尊厳の地」に関する小著の中で、自らを読者に名乗る言葉——ego frater franciscus pipinus de bononia ordinis fratrum predicatorum<私、説教師修道会のボノニアのフランキスクス・ピピヌス修道士>——は、多くの公式記録に見いだされ、一番古いものは1272年、最も新しいのは1321年である²⁸⁾。1295年9月2日の公正証書にはすでにボローニアの修道院のsupprior<副院長>として現れる、が誕生と死去の正確な年次は分からない。彼自身上述の小冊子で、1320年に聖地への旅を果たしたことを伝えている²⁹⁾。

かの翻訳の発端と目的については、自分の典拠の序文に代えて置いた序の中で自ら述べている。

Librum <prudenter, honorabilis ac fidelissimi viri, domini> Marchi Pauli <de Venetiis, de conditionibus et consuetudinibus orientalium regionum, ab eo in vulgari fideliter editum et conscriptum,> compellor ego <Frater Franciscus Pipinus de Bononia, ordinis fratrum praedicatorum> a plerisque patribus et dominis meis veridica et fidei translatione de vulgari ad latinum reducere, ut qui amplius latino quam vulgari delectantur eloquio, nec non et hii qui vel propter linguarum varietatem omnimodam aut propter diversitatem ydeomatum proprietatem linguae alterius intelligere omnino aut faciliter nequeunt, aut delectabilius legant aut liberior capiant. Porro per se ipsos laborem hunc, quem me assumere compulerunt, perficere plenius poterant; sed altiori contemplationi vacantes et infimis sublimia preferentes sicut terrena sapere ita terrena describere recusarunt. Ego autem, eorum obtemperans iussioni, libri ipsius continentiam fideliter et integraliter ad latinum planum et apertum transtuli, quem stilum huiusmodi libri materia requirebat. Et ne labor huiusmodi inanis aut inutilis videatur, consideravi ex libri huius inspectione fideles viros posse multiplicis gratie meritum a domino promereri. Sive quod in varietate, decore et magnitudine creaturarum mirabilia dei

opera aspicientes ipsius poterunt virtutem et sapientiam venerabilius admirari; aut videntes gentiles populos tanta cecitatis tenebrositate tantisque sordibus involutos gratias deo agente qui fideles suos luce veritatis illustrans de tam periculosis tenebris vocare dignatus est in admirabile lumen suum; seu illorum ignorantie condolentes pro illuminatione cordium ipsorum dominum precabuntur; vel indevotorum christianorum desidia confundetur, quod infideles populi promptiores sunt ad veneranda simulacra quam ad veri dei cultum prompti sint plurimi ex hiis qui christi sunt caractere insigniti; sive et religiosorum aliquorum corda provocari poterunt pro ampliacione fidei christiane ut nomen domini, ihesu christi, in tanta multitudine populorum oblivioni traditum, deferatur, spiritu favente domini, ad obcecatas infidelium nationes, ubi messis quidem multa operarii vero pauci. Ne autem inaudita multa atque nobis insolita, que in libro hoc in locis plurimis referuntur, inexperto lectori incredibilia videantur, cunctis in eo legentibus innotescat prefatum dominum Marchum, horum mirabilium relatorem, virum esse prudentem, fidelem ac devotum atque honestis moribus adornatum, a cunctis sibi domesticis testimonium bonum habentem, ut multiplicis virtutis eius merito sit ipsius relacio fide digna. Pater autem eius, dominus Nicholaus, totius prudentie vir, hec omnia similiter referebat. Patruus vero ipsius, dominus Matheus, cuius meminit liber iste, vir utique maturus devotus et sapiente, in mortis articulo constitutus, confessori suo in familiari colloquio constanti firmitate asseruit librum hunc veritatem per omnia continere. Propter quod circa translationem ipsius laborem assumpsi conscientia tutiore, ad consolationem legentium et ad laudem domini Ihesu Christi cunctorum visibilium et invisibilium creatorem.^{6*)}

「思慮深く誉れ高く信仰いや篤き御方マルクス・パウルス・デ・ウェネティイス殿の、その彼により俗語で記され忠実に世に出された、東方諸地諸国の在り様と習わしに関する書を、私こと説教師修道会ボノニアのフランキスクス・ピピヌス修道士は、多くの神父殿や上司からあるがまま正確に俗語からラテン語に書き替えるよう命じられた。俗語よりラテン語を歓ぶ方や、また様々に異なるあらゆる言語あるいは言葉の異なりゆえ、完全にあるいはた易く理解することのかなわぬ方々も、より楽しく読めまた自由に分かるよう、とのためである。もっとも、私に引き受けるよう要請されたこの仕事も、彼ら自身によってより十全に遂行されたことであろうが、しかし彼らはより深い瞑想にふけり、ごくつまらぬことより崇高なことを好み、地上のことを知ったりこの世のことを書いたりするのは気が進まなかったことであろう。そこで私は、彼らの命令

に従い、同書の内容をその題材にふさわしいような文体で忠実かつ余すところなく平易で明解なラテン語に訳した。また、この仕事が虚しく無駄と見られぬよう、本書を読むことにより、敬虔な人々は主から様々な恩寵の恵みを賜うことができようと考えた。すなわち、被造物の様々な素晴らしい偉大な驚異の中に神の御業を見て、その尊敬すべきお力とお知恵に驚嘆の念を覚えることができようからである。あるいは、異教の民がかほどの盲目の暗闇と汚濁に包まれているのを見て、己が信徒を真実の光で照らしかくも危険な暗闇から嘆ずべきご自身の御光の中へと召し給う神に、感謝を捧げるであろう。あるいは、彼らの無知を哀れみ、その心の蒙を啓き給うよう主に祈るであろう。あるいは、信仰篤からぬキリスト教徒たちは、キリストの印が明白に印されている者の大多数が真の神の信仰に傾くよりも、不信の民が偽りの崇拜に傾きがちであるのを見て、自分らの怠慢が恥ずかしく思われるであろう。あるいは、かくも多くの民草の中に忘却のままに捨て置かれている主イエス・キリストの御名が、収穫の多く働く者の少ない不信者の盲目の国々へと、主の御心のおかげをもって持ち来たられるよう、何人かの聖職者たちの心がキリスト教信仰の普及のためにかき立てられるであろう。さてところで、本書の多くの箇所に記されている聞いたこともない我々には常ならぬ多くのことが、慣れない読者に信じられないことと見られぬよう、これを読む誰にも、これら驚くべきことどもの語り手である上述マルクス殿は、彼を知る者皆がこぞって良く証言するごとく、思慮深く信仰篤く正しき行いに身を包んだ御方であり、その数々の高德からしてその報告はまさしく信頼に値するということが知られねばならない。その父ニコラウス殿もまた、とても思慮深い御方であったが、これら全てを同じように語っておられた。叔父マテウス殿も、彼も本書に記されているが、円熟した信心深い賢明な御方であったが、死に臨んでの懺悔聴聞僧との親しき会話の中で、同書が全てにおいて真実を含んでいることを確固として請け合ったのであった。それがゆえ私はこの翻訳の仕事を、読者の愉しみと、見えるもの見えざるもの一切の造物主たる主イエス・キリストの賛歌のために、さらに確信をもって取り組んだ次第である」。

ここに引いた文章から、ピピーノがまさに上司からマルコの書を翻訳するという任を託されたことが分かる。エックハルト(*op. cit.*, p.539)によると、その決定は1302年と1315年にボローニャでもたれた修道会の二つの総会のどちらかで行われたようである。有り得ることである。いずれにしてもその仕事は、マルコの死より前でニコロとマッテオの死より後である^{7*)}。ピピーノ、あるいは彼をこの仕事に就かせた者は、ポーロの物語を知っているだけではない。ポ

一口たちが誰であり、マルコがヴェネツィアでどんな評判に取り巻かれており、その言葉にどのような重みを与えることができるか知っている。マッテオが死の間際に言ったことも耳にしている。

より厳密な年代確定は私には不可能である。すでに引用した『年代記』の箇所から、マルコ・ポーロの訳はそれより前であることが分かる。しかし、『年代記』の編纂についても正確な時期は分からないし、綴られている出来事の最後の年（1314年）の *post quem* <その後>という言葉しか我々は手にしていない。

5 この版の特質と重要性

Fならびにオリジナル版に対するPの関係についても、VAについてと同じことが言える。PはVAのいくつかの形の一つであり、本質的にそうしたものとして判定されるべきである。我々の研究の目的にとっての有益さは、これが原初のVAを復元するために我々に提供するわずかな要素のみとなる。つまり、結構良好な稿本から由来することと、それに忠実であるという二重の価値である。

全体としてピピーノは、序文の中でみずから宣言しているとおり、「忠実でありのまま」との賛辞に値する。マルコ・ポーロ研究者を強く印象づけたいくつかの新味は、全く外面的なものである。3巻への分割——第1巻67章Fの第75章まで、第2巻70章Fの158章まで、第3巻50章——とて、Pが新たな巻の始まりとしているところで、マルコの話の中でもいかにはっきりと新たな重要な題材への移行が見られるか観察すれば、驚くほどのことではない。VA5の写字生もFの第158章以下を別の1巻としていることはすでにみた³⁰⁾。自分の典拠を、外面的な形によってでないときは自分の考えにそって、その題材を勝手に組み合わせたり分割したりしている他のいくつかのより小さな例についても同じことが言えよう。語られている事柄の内容だけから見れば、ピピーノの訳は忠実である。しかし、オリジナル・テキストに親しんだ者にとっては、深いところでの調子の変更、マルコの個性とははっきりと異なるピピーノの個性の行き過ぎた自己主張が見逃されることはない。その翻訳にカソリックの宣伝のために取り組んだドメニコ会士の心性が、いくつかの表現の反異教的熱意に中に余りにもしばしば現れる。マホメットの名は常にその名誉を汚すなんらかの形容辞に伴われる：<最悪の>(I.37), <哀れな>(I.45), <おぞましい>(I.28, 31, 45, III.14, 39)。未開の風習の一つとて——マルコは近代的な科学者の冷静さで記しているが——お決まりの嫌悪なしに言及されることはない。「自分たちのあがめる神をく

その悪らつな掟>に反して冒瀆することのないよう気をつける」(I.36);「<迷妄の>風習に則ってその前で行う<極悪の>祈祷」(I.45);「<盲目の愚昧である>その神々によって」(I.46);「<サタンによって非道い狂気に陥れられている>」(I.54);「<悪魔の迷妄に欺かれて>信じる」(I.58);「<流神の>供犠」(I.67);「その寺院の中に<流神の>燈明をたくさん灯す」(I.67);「この<不敬の>香の捧呈が済むと」(II.15);「<盲目の>偶像崇拜に由来する<忌むべき>誤用」(II.37);「この<偽りの>神の像を作る」(III.67)等。ピピーノのもったいぶりは、マルコの文体の素朴な自然さからこれに劣らず遠い。題材ゆえに単純で平易な形を採ったと序文で宣べてはいるけれども、作品に文学的な色付けを施そうとする努力は至るところで目につき、そのためほとんど常にわざとらしさと冷たさの感じを与える。文体上の野心が、とりわけ内容と無縁ないくつかの展開から透けてみえる。たとえば、プロローグの結びをより厳粛なものにするため：「<長い年月と多くの苦労の後、神に導かれて>コンスタンティノーブルに着いた。そこから<多くの労苦と危険から解放し給うた>クリストに感謝しつつ>・・・<莫大な富と大勢のお供とともに無事>ヴェネツィアに帰り来たった」(I.10; cfr.F.XIX.55)。山の老人の偽りの天国の偽満を告発する中で、まるでVAの細部では十分でないかのごとく：「<彼女らは様々な高価な衣裳をもち、驚くべき品々で身を飾っていた。その仕事は、そこに連れてこられた若者たちをあらゆる快樂と欲望に誘うことだった。そこには衣服、寝床、食べ物など欲しい物はいくらでもあった。嫌なことは何もされなかった。遊ぶこと、淫蕩なこと、娛しむことでなければ、何に時を費やすことも許されなかった>」(I.28)。Pがナヤンの敗北の後クブライの口にさせている演説をFの第80章18-26と対照し、その結びがどう変えられているか見られたい：「となれば<これが故に、誰も汝らの十字架を敢えて冒瀆することのなきよう、ユダヤ人、サラセン人その他全ての者に命じよう>」(II.6)。Pが我々に提供するような乳の捧げものの描写は、私の知る限りVAの他のどの異本にもみつからない(F.LXXV 31-45)：「<その祭日になると、大量の馬乳が立派な鉢に用意される。そして王が手ずから多くの乳を自分たちの神々を敬ってそこここにまき散らす・・・。この不敬な供犠のあと王は白馬の乳を飲む>」。次のような調子には聖書の言葉に親しんだ耳が感じられる：「彼らは思慮深く賢明で真面目な人間らしく、一つ一つに答えた。<そのため彼らになんども自分のもとに来るよう命じ、彼らはその面前で好意を得たのであった>」(I.3)。これ以上例を増やさなくとも、その結果がいかに穏やかなものであらうと、我々がまさに文学的な試みを前にしていることは否定すべくもない。このボローニアの修道士は、上司から課された仕事をま

さしく熱心に果たそうとしたのだった。

解釈はたいてい正しい。いくつか誤りはある——少なくとも我々が知っているVAの派生物と比べて——が、その仕事の全般的な真面目さがそれで傷つけられていると言うことはできない³¹⁾。我々がすでに触れた全体的調子そのものは厳密な正確さに反している。とりわけ、ヴェネト語原典がすでに調子を強め始める点において、ピピーノはすぐさまさらに大げさな色合いに引きずられるがまになる³²⁾。注釈への銜学的な傾向がしばしば害をもたらせており、マルコのテキストに混ぜ合わしている書き込みは結構頻繁である。少なくともVAの他の派生物および他の家族にはない小さな新記事を、私はそのようなものと見なす。

III 11「その国に1年いたので、＜ヴェネツィアに帰ろうとした＞」 V 3「＜ヴェネツィアから連れて行ったキリスト教徒の一行を伴う家来たちを＞引き具した」 VIII 21「王は、エルサレムの主の墓に吊るされているランプの油を持ち帰ってくるよう命じた。＜彼は、数ある神々の中でキリストが唯一であると信じていた＞」 X 6「ピアチェンツァの＜副爵の＞テオバルド殿」 XVIII 2 2-5「[3人の使者が] 自国に戻りたがっているのを・・・知って、＜アルゴン王の名誉のために＞彼ら3人を王女とともに彼のもとの送り返し、＜願わくば自分たちも国に帰ってもよろしいかと＞、恭しく王に許しを願い出た」 XXIII 21「そこには＜東方の＞聖レオナルドの修道院がある」 XXV 2「＜聖書ではスシスと呼ばれる＞バグダード市」 XLIV 8「＜だからまた荷獣に水をやるために、その砂漠を急いで横切らなければならない＞」 LVII 7「砂漠のため次のような用意をする。＜ロバにしろラクダにしろ、食糧が尽きると殺すか砂漠に置き去りにする。目的地に着くまで餌をやることができないからである。餌が少なくて済み、たくさんの荷を運ぶからラクダの方を好んで使う＞」 LIX 16-7「かくも忌むべきことをこれ以上敢えて堪え忍ぶことのなきよう、しかして自分たちの妻の名誉を守り、＜旅人のための共同の宿泊所を設けるよう＞彼らに命じた」 LXXIX 30「ナヤンはキリスト教徒であると言明していたが、＜その信仰の勤めを真似することなく・・・また多数のキリスト教徒を擁していた＞」 CLXXV 117-9「他の夫たちが死んでもやはり、妻たちの多くが・・・＜あの世でもその妻であるようにと＞・・・自ら一緒に火の中に身を投げる」。

以上のようなことが明らかとなった今では、過去に誰かがフラ・ピピーノの作品に対してもったような熱狂的なひいきはもはや不可能である。ポーロのオリジナルに対するPの正確な価値がわかった以上、「イタリアは、ピピーノのテキストのよくできた一版をこれ以上長く待ちのぞむことのないよう」との、

ビアンコーニとバルトリによって口にされた願いを、私は今日もうあえて繰り返えそうとは思わない。ともあれ、*De conditionibus et consuetudinibus orientaliū regionum*『東方諸地の在り様と習わしについて』は、文明の歴史における一つの際立った記録として今も残っている。軽減した分量、ラテン語という衣裳の普遍性、宗教権威の側からのある種の公式的採用、これらはマルコの書のために有益だった。フラ・ピピーノの「マルコ・ポーロ」は、まさしく聖職者・研究者・学識者のものであった。その幸運がどれほど広範で長続きしたかは、すでに述べたところから明らかであろう。セヴィリアのコロンブス図書館には、クリストーフォロ・コロンブスが携えていたピピーノの一本(1485年版)が今なお保管されている。どの紙面にも注意深く読んだ痕が残っている³³⁾。いくつかの書き込みの性質は、この偉大な夢想家の天才的な大胆さが真にどのような箇所に向かっていたのかを、疑いもなく示していると私には思える^{8*)}。その英雄的な企図の誕生にマルコの驚くべき東方がいかなる役割を果たしたかは、別のことからよく知られており、この偉人の手がポーロの小冊子の余白に書き込んでいるいくつかの言葉は、強く我々を打たずにはおかない：「香料・真珠・貴石・金糸の布・象牙 - 極上のラピスラズリ - 無数の商品 - 無限の絹 - シナモン・アロエその他我々のところには到来しない多くの香味料 - ショウガ・シナモン・多くの香料・トルコ石 - パヨロの大量の金 - 多くの金銀 - ここには大量の金と最高の香料と多数の象がいる - 最大量の金 - 最高の絹と商品 - 大量の絹と金糸の布 - 最大量の砂糖・多くの香料 - 多数の船・ショウガ・大量・真珠と貴石・食糧・大量 - 最大量の金 - 真珠・ルビー - 無限の香料・とても白い胡椒 - ここにはルビー・サファイア・トパーズがある - ここには素晴らしい輝きの掌大のルビーがある - ここには真珠が大量にある - 最大の財宝 - 大量の香料 - 多くの高価な毛皮、等々」。

【註】

1*. Luigi Foscolo Benedetto, *op. cit.*, 'La tradizione manoscritta', Cap.V:La versione di Fra Pipino, pp.cxxxiii-clvii. (ベネデット『マルコ・ポーロ写本』(4)《大阪国際女子大学紀要》26-1, 2000, pp.151-70,より転載。)

原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。引用例の一部を省略した場合は〔以下略〕と記した。原註は大幅に省略した。＜ ＞内は引用文中イタリック体の箇所、[]内は訳者補足、*は訳注、ローマ数字はベネデット校訂版Fの章、アラビア数字は同行(es. XVII 3-5)。

(原註)

1. Yule, vol. II 付録ポーロ写本リスト(pp.530-51)ならびにp.526の表で、Cordierはビピーノ写本を他のラテン語稿本から正しく区別していない。計42のラテン語写本が挙げられているが、その内ははっきりとビピーノ版と断定できるのは26(No.1,2,3,5,9,10,12,13,14,16,25,26,31,32,38,39,45,53,54,60,66,67,74,76,80,82)。

2. Cfr. *Recueil de Voyages et de Memoires*, t. IV, Paris 1839, p. 3; *Catalogue des livres et cartes geographiques de la biblioteque de feu M. le baron Walckenaer*, Paris, L. Potier, 1853, p. 278, n. 3385.

3. Cfr. V. Rossi, *La biblioteca manoscritta del senatore veneziano Jacopo Soranzo*, in <Il libro e la stampa>, vol. I pp. 127-8.

4. Cfr. V. F. De Gudenus, *Recensus codicum antiquorum complurium tam manuscriptorum quam impressorum Moguniae in Rmi Capituli metropolitani Bibliotheca latitantium*, in <Sylloge prima variorum diplomatiorum monumentorumque veterum ineditorum>, Francoforte 1728, pp. 377-86.

5. Cfr. F. Falk, *Die ehemalige Dombibliothek zu Mainz*, Leipzig 1897, pp. 67 sgg., in <Beihefte zum Centralblatt für Bibliothekswesen>, n. XVIII.

6. Yule, *op. cit.* pp. 120-1; Olivieri, *Di una famiglia di codd. ital. ecc.*, pp. 11-2.

7. Cfr. il catal. dello Stephens, pp. 113-5.

8. Cordier-Yule, n. 7, II, p. 531.

9. 引用はストックホルム写本より。

10. 同集成の内容については、cfr. Wh. Stokes, *Anecdota oxoniensia, parte V -- Lives of saints from the book of Lismore*, Oxford 1890, pp. VI sgg. ポーロの部分は、Wh. Stokes, *The gaelic abridgement of the book of ser Marco polo*, in <Zeitschrift für celtische Philologie>, I, 1897, pp. 245-73, 362-437 に、英訳つきで刊行されている。

11. E. Teza, *I viaggi di Marco Polo nella vecchia versione boema*, Venezia 1908, in <Atti del R. Istit. Ven. di Sc. lett. ed arti>, t. LXVII, parte II. テクストは、<Vybor z literatury ceske>, Praga 1868, t. II pp. 545-72 に、第1巻1-12, 28-29, 51-54章、第2巻15, 64-66章、第3巻53章が刊行されている。

12. *Bibl. manoscritta di T. G. Farsetti patrizio veneto*, Venezia 1771, t. I, p. 361; Teza, *art. cit.* pp. 12-3.

13. Cfr. Cordier-Yule, II, 565-6; K. Burger, *Die Drucker und Verleger in Spanien und Portugal von 1501-1536*, Lipsia 1913, p. 37; J. C. De Figaniere, *Bibliographia historica portugueza*, Lisboa 1851, p. 177, n. 947. 同書は、1902年リスボンで *Publicacoes da Bibl. Nacional* の一冊として *O livro de Marco Paulo* のタイトルで再刊されている。

14. これがどれほど歴史的事実に基づいているのかは分からないが、Don Pedroが実際にイタリアからマルコの一稿本を持ち帰ったことは有り得る。しかし、Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*,

I,p.176が記すごとく、ポルトガル語訳がまさにその稿本に基づいて行われたという事実はない。またFernandezの訳についてなら、Ramusioのいうごとく「次いで彼らの言葉に訳されたその書は、聡明な王たち皆に東方インド発見の欲望を掻き立てた、とりわけD.Giovanni2世がそうであった」というのは、同王が訳の7年前に死亡していることからして正しくない。また、王子Don Pedroとマルコが出会ったと考えるのもまったくの空想。

15. 同印刷本には年・場所・使用活字の記載はない。Cfr.Cordier-Yule,II,558-9; Campbell,*Annales de la typographie neerlandaise au XVe siecle*,La Haye 1894,n.1434.

16. 例えば冒頭のところで、<pipinus>ではなく<franciscus pepur de Bononia>となっており、これは初期のマルコ・ポーロ研究者を少なからず惑わした。

17. Marsden,op.cit.p.LXXV:「その由来についてグリナエウスが不思議な沈黙を守っているNovus Orbisの版は、・・・実際この1502年のポルトガル語版からの1532年の重訳であった可能性が極めて高いようである」。他に、Langlois,*art.cit*.p.257; *Histoire generale des voyages ou nouvelle collection de toutes les relations de voyages par mer et par terre etc.*,L'Aia,P.De Hondt,1749,t.IX,p.327. この説は今なお繰り返されるが、Bianconi,*art.cit*.pp.29 sgg.に決定的に論駁された。

18. *Novus Orbis*でマルコのあとに収められているハイトンについても、序文で同様なことが述べられている(p.366)。

19. Cfr. Kohler,*Doc.armen.*,II p.CXXV. Muratori,SS IX 583,は、Reineckによるピピーノのイタリア語訳(Treviso 1590)があるというが、確認されない。

20. Cfr. Quetif e Echard,II,p.819; P.A.Orlandi,*Notizie degli scrittori bolognesi e dell'opere loro stampate e mss.*,Bologna 1714,p.121.

21. 同書には単にF.G.L.と頭文字があるだけだが、それがFrancois Gruget Lochoisであることは確実。

22. Cordier-Yule,II,557,nn.4-5には、Altenburg 1609が挙げられているが、Lipsia 1611しか知られない。

23. Purchas,*His Pilgrimes*,t.III,London 1625,p.65.

24. Cfr.Cordier-Yule,II,572,n.68 & 568,n.49. 後者をPierre Bergeronによる訳とするのは誤り。

25. Quetif-Echard,I,539-41; Muratori,SS IX 583-6; G.Fantuzzi,*Notizie degli scrittori bolognesi*,Bologna 1789,VII,46-8; L.Manconi,*Frate Francesco Pipino da Bologna de'PP.Predicatori,geografico,storico,e viaggiatore*,in<Atti e memoria della R.Deputazione di Storia Patria per le provincie di Romagna>,XIII 1895,pp.237-334.

26. Muratori,SS VII 659 sgg.,il lib.XXVに、*De acquisitione et amissione Terrae Sanctae*(ただし彼はそれを単にBernardo il Tesoriereのフランス語本のラテン語訳と考えている)と、SS IX 587 sgg.に*Chronicon*の後半部が刊行されている。Manconi,*art.cit*.pp.285-315に作品全体の総目次がある。

27. Manzoni, *art.cit.* pp.316-32に刊行。

28. Cfr. G. Bertoni, in *Archivum romanicum*, IV 1920, pp.105-6.

29. Manzoni, *art.cit.* に、同修道士とボローニアのピピーノ家との関係が考証されており、Francescoが<Rodaldus Pippinus>(1313.9.3の記録)の息子であることは疑いない。

30. Yuleも、ピピーノによって伝統的となった3巻への分割を採っている(最後の歴史の数章を第4巻としたのはまったくの主観)。ロシア語訳も同じ: I. P. Minajew, *Il viaggio di Marco Polo. Traduzione del testo vecchio-francese. Edizione dell'Imperiale Societa Geografica sotto la direzione del membro effettivo W. W. Bartoldo*, Pietroburgo 1902.

31. P.es.: LXX 13-5, CXVI 41, CXXI 5-6, CXXI 29-34, CXXV 10.

32. P.es.: XXXVII 34-5, XXXVIII 4, LIX 24-5, CLI 14, CLXXV 152-3.

33. Cfr. S. De la Rosa y Lopez, *Catalogo della Colombina*, p.53; C. De Lollis, *Autografi di C. Colombo*, tavole LXXXIV-C, in <Raccolta di documenti e studi pp. dalla R. Commissione colombiana pel quarto centenario della scoperta dell'America>, vol. III, Roma 1892.

(訳注)

2*. 以下各写本説明の部分は抄訳。書き出し・結び・典拠などは省略した。なお、() 内の番号は便宜上訳者が付けたもので、原文にはない。

3*. エルキュラン *herculins*: ユールによれば野生羊 *arcoli*.

4*. 東洋文庫所蔵になるこの版の一本の写真コピーが1949年国会図書館から刊行されている: *Of the Marco Polo Itinerarium*, Antverpiae 1485, by National Diet Library, Tokyo 1949.

5*. 前掲拙稿(2)「第6章: F以前の段階」。

6*. < >内は、ベネデットのテキストでは省略されている部分。原文から補った。

7*. ニコロの死は1300年以前、マッテオはほぼ確実に1310年、マルコは1324年。Cfr. 拙稿「マルコ・ポーロ年次考」(2), 本誌25-2, 1999, pp.45-73.

8*. Cfr. 杉本直治郎・伊東隆夫「コロンブスと<東方見聞録>——コロンブスの地理上発見の動機の実証的研究」『東洋学報』38-2, 1955.